



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『哲学字彙』の訳語に関する一考察：「Eの部」を中心に
Author(s)	朴，均轍
Citation	国語国文研究, 110, 74(1)-59(16)
Issue Date	1998-11-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94704
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_110_74-59.pdf



『哲学字彙』の訳語に関する一考察

——「Eの部」を中心に——

朴 均 轍

0 はじめに

『哲学字彙』は初版(明治14年・1881)、再版(明治17年・1884)、三版(明治45年・1912)からなるが、ここで対象にするのは、初版本(井上哲次郎等編・東京大学三学部・国立国会図書館蔵本、127頁)である。本書(初版)は幕末・明治初期に刊行された辞書の中で、哲学専門に関する最初の英和辞書である。

『哲学字彙』については、森岡健二編著『近代語の成立 明治期語彙編』(明治書院、1969)、永嶋大典著『蘭和・英和辞書発達史』(講談社、1970)、飛田良文編『哲学字彙 訳語総索引』(笠間書院、1979)、佐藤亨著『近代語の成立』(桜楓社、1992)で、その訳語について論じられている。森岡氏の研究は、哲学用語を他分野の用語と比較したもので、明治17年刊の再版本『改訂増補哲学字彙』を対象にしている。佐藤氏は、初版本の分野名の書かれた訳語を中心に訳語の性格を論じているが、典拠および前後辞書との影響関係についての説明が不十分であると思われる。飛田氏の研究は初版本の索引で、書誌的な面で意義と価値が大きいと思われる。

本稿では、明治時代訳語(とくに哲学分野)の製作および定着過程研究の一環として、明治初期の辞書である『哲学字彙』(初版)を取り上げ、その資料的な性格、意義を明らかにすることを目指す。ここでは、初版本の「Eの部」の訳語のうち、二字漢語(全119語)を対象にして、訳語の出自、一般著作・辞書との影響関係、生死語の性格などについて考察を試みる。訳語の調査にあたって、原語の品詞が違っていても同じ語として扱うことにし¹⁾、用例は必要に応じて挙げることにする。

1 訳語の出自

まず、『哲学字彙』が訳語を造るにあたって、江戸時代以前の国書・漢籍など、既存の語をどれくらい利用したのかを知るため、以下の資料を用いて用例があるかどうかを調べてみることにする。

□「漢籍」の用例調査に用いた資料

- ・『漢語大辞典』(1988-1993) 羅竹風等編、漢語大辞典出版社
- ・『辭海』(合訂本)(1947) 舒新城・徐元誥・沈頤・張相等編、中華書局發行所

- ・『大漢和辞典』（修訂版第一刷）（1984－1986）諸橋轍次著、大修館書店
- ・『索引本佩文韻府』（1937）王雲五、台湾商務印書館
- ・『仏教語大辞典』（1977）中村 元、東京書籍株式会社
- ・『明治のことば辞典』（1986）飛田良文・惣卿正明、東京堂出版

□ 「国書」の用例調査に用いた資料

- ・『大日本国語辞典』（1919）上田万年、松井簡治共編、富山房、金港堂書籍株式会社
- ・『日本国語大辞典』（縮刷第一版）（1979－1981）日本大辞典刊行会編、小学館
- ・『日本古典文学大索引』（1－66 卷）（1964）岩波書店編集部編、岩波書店
- ・『日本古典文学大索引』（67－100 卷）（1968）岩波書店編集部編、岩波書店
- ・『江戸語大辞典』（1974）前田 勇編、講談社

『哲学字彙』の訳語、119 語のうち、漢籍にある用例は 100 語である。漢籍に典拠のある訳語の中には、出典の方の意味と現在普通に使われる意味とがかなり違う場合がある。たとえば、『大漢和辞典』の「功能」を引いてみると、

① はたらき。うでまえ。器量。技倆。

[管子・乗馬] 工治容貌功能。

[漢書・杜欽伝] 考功能于官職。

[後漢書・公孫述伝論] 推其無他功能、而至於後亡者、將以地辺処遠、非王化之所先呼。

② ききめ。効能。

[法苑珠林] 功能利益。

とあり、現在使われる意味と同じものは②の [法苑珠林] の用例であることがわかる。全 119 語に対し、漢籍の典拠を調べた結果を示すと、以下のとおりである。

(A) 典拠アリ…… 100 語

消魂 [桃花扇]、大悦 [孟子]、模倣 [説文]、応報 [漢書]、証明 [晋書]、勢力 [後漢書]、選挙 [管子／通典]、解脱 [法華経／史記]、鼓舞 [易経／淮南子]、方向 [紅樓夢／明史稿]、考試 [礼記／後漢書] 等

(B) 典拠ナシ…… 19 語

選民、平称、多義、秘教、運質、存体、練過、容性、流出、元素、困却、炎情、環象、進化、展性、外延、確執、能弁、表出

(A)のうち、今日一般に使われる意味 (①) と漢籍のそれ (②) を比べてみると、

・語法 ① 「文法、言い方」

② [王維] 鳥来還語法、客去更安禪。

- ・外界 ①「自分をとりまく、まわりの世界」
②〔金史〕用銀而計數税之、上曰、如此是公使銀入外界也。
- ・除免 ①「義務を果たさなくてもよいと許すこと」
②〔唐律〕有官爵者、各從除免当贖法。

のように、意味がかなり違っている。この種のもの（意味の転化）は、全 119 語の中で 3 語しかなく、これを見ると当時訳語を当てる時、ほとんどは漢籍の意味をそのまま用いたことがわかる。

国書および漢籍の用例を調べて、それぞれ 70 語、100 語を得た。それを分類すると、次のとおりである。

- (A) 国書・漢籍にともにアリ…… 65 語
消魂、大悦、儀範、教育、結果、応報、効驗、果報、功能、靈驗、努力、選挙、証明、口才、解脱、鼓舞、奨励、方向、偏僻、困倦、演述、註説、目的、自己……
- (B) 国書にナシ、漢籍にアリ…… 35 語
家政、奪魄、模型、実効、鼓励、電気、分出、情緒、争先、勢力、円極、清静、差錯、謬誤、結末、熱心、沈着、公教、経験……
- (C) 国書にアリ、漢籍にナシ…… 5 語
流出、秘教、能弁、確執、表出
- (D) 国書・漢籍にともにナシ…… 14 語
選民、元素、困却、炎情、環象、平称、多義、運質、進化、存体、展性、練過、容性、外延

以上の調査結果を見て、次のことがわかる。まず、国書および漢籍にともに用例のある語が一番多いということで、これは原語に訳語を当てる時、一般に使われている言葉が一番用いやすく、また、自然であったと思われる。次に、国書の用例より漢籍のそれを、より多く用いたことである。そして、国書にも漢籍にも適当な言葉が見当たらない場合は、(D)のように新しく訳語を製作したことがわかる。とくに、(D)は明治時代の新造語であり、和製漢語である可能性が少なくない。

2 『哲学字彙』が受けた影響

2.1 『英華字典』との関係

本書は、慶応 2（1866）から明治 2 年（1869）にかけて刊行された代表的な英華辞書で、編者はイギリス人 W. Lobscheid である（2013 頁）。森岡（1969）によると、この辞書が近代日本語語彙の形成に大きな影響を与えたとされる。

『哲学字彙』で対象にする訳語は全 119 語で、『英華字典』からの影響を受けたと思われるもの（完全に一致するか、一部分が一致するもの）は、以下の 35 語である。

『哲学字彙』	『英華字典』
教育 (Education)	養育、教養、 <u>教育</u> …
効驗 (Effect)	果… <u>靈驗</u> 、 <u>効驗</u> 、 <u>応驗</u> …
流出 (Efflux)	<u>流出</u> 、流出者…
努力 (Effort)	出力、奮力… <u>努力</u> …
自己 (Ego)	自愛、自私、独自 <u>自己</u> 、我
電気 (Electricity)	<u>電氣</u> 、電氣之理…
奨励 (Encouragement)	鼓舞… <u>奨励</u> …
勢力 (Energy)	力、 <u>勢力</u> 、心力…
平等 (Equality)	均平者、 <u>平等</u> …
清静 (Equanimity)	定心、不動之心、 <u>清静</u> 之心
過失 (Error)	錯、 <u>差錯</u> … <u>過失</u> …
証拠 (Evidence)	供… <u>証拠</u> …
查驗 (Examination)	考… <u>查驗</u> 貨物
交易 (Exchange)	<u>交易</u> 、貿易、換…
除免 (Exemption)	免者、 <u>除免</u> 者…
練過 (Experience)	經試者… <u>經練過</u> …
表出 (Expression)	有勢者… <u>表出</u> 者…
延長 (Extension)	四面整大… <u>延長</u> 其年
靈驗 (Efficiency)	能、力… <u>靈驗</u> …
黽勉 (Effort)	出力…努力… <u>黽勉</u> …
鼓励 (Effort)	出力…努力… <u>鼓励</u> …
選民 (Elect)	特選者… <u>選民</u>
口才 (Eloquence)	…口給、 <u>口才</u> …
窘迫 (Embarrassment)	…因果… <u>窘迫</u> …
爭先 (Emulation)	… <u>爭先</u> … <u>爭勝</u> …
鼓舞 (Encouragement)	<u>鼓舞</u> 、 <u>勸</u> …
困倦 (Ennui)	<u>困倦</u> … <u>懶倦</u> …
談詒 (Ennui)	困倦、 <u>談詒</u> 、 <u>懶倦</u> …
熱心 (Enthusiasm)	憤心、 <u>熱心</u> …
平称 (Equilibrium)	平兌者… <u>平称</u> …
隱者 (Eremite)	<u>隱者</u> 、隱居者…
差錯 (Error)	錯、 <u>差錯</u> … <u>過失</u> …
永遠 (Eternity)	<u>永遠</u> 、長遠、永世…
考試 (Examination)	考、 <u>考試</u> …
感激 (Excitement)	激… <u>感激</u> 、振動…

『英華字典』が英語に中国語を当てた辞書であるにもかかわらず、一致する訳語が、全訳語の三分の一ぐらいを占めているということは、後に見る代表的な英和辞書である『附音挿図英和字彙』（初版）と一致する訳語が40語しかないこと、そして、これが中国の辞書であることを考えると、いかに影響が大きかったかがわかる。

2.2 英和辞書との関係

本節では、『哲学字彙』以前に刊行された、次の三つの英和辞書を取り上げ、影響関係を調べてみることにする。

- ・『英和对訳袖珍辞書』（初版）（文久2年・1862）堀達之助編、徳川幕府洋書調所（以下、『袖珍辞書』と略す）、953頁
- ・『和英語林集成』（再版）（明治5年・1872）平文編訳、日本横浜梓行、632、201頁
- ・『附音挿図英和字彙』（初版）（明治6年・1873）子安 峻、柴田昌吉共編、日就社（以下、『字彙初版』と略す）、1548頁

2.2.1 『袖珍辞書』と一致する訳語……8語

『哲学字彙』	『袖珍辞書』
効験 (Effect)	効験、功績…
電気 (Electricity)	<u>電気</u>
能弁 (Eloquence)	能弁
目的 (End)	終り、志、 <u>目的</u> 、大切
癲癇 (Epilepsy)	<u>癲癇病</u>
平等 (Equality)	一樣ニスル、平等ニスル…
証拠 (Evidence)	<u>証拠</u> 、明白ニ見テ居ルコト
喜悦 (Exultation)	<u>喜悦</u>

2.2.2 『和英語林集成』（「英和の部」）と一致する訳語……8語

『哲学字彙』	『和英語林集成』
電気 (Electricity)	<u>Den-ki.</u>
能弁 (Eloquence)	<u>Noben.</u> Benzetsu. No yoi koto.
目的 (End)	Owari. Shimai. Hate; <u>moku-teki</u> …
遺恨 (Enmity)	Urami. <u>Ikon.</u> uppon.
癲癇 (Epilepsy)	<u>Ten-kan.</u>
証拠 (Evidence)	<u>Shoko.</u> Akashi.
交易 (Exchange)	Tori-kaye. Kawaru koto. <u>Koyeki</u>
喜悦 (Exultation)	Yorokobu. Ureshigaru. <u>kiyetsu</u> suru.

2.2.3 『哲学字彙』と一致する訳語…… 40 語

『哲学字彙』	『字彙初版』
教育 (Education)	養育、 <u>教育</u> 、教訓
功能 (Efficiency)	功力、 <u>功能</u> 、靈驗、尽力
電気 (Electricity)	<u>電気</u> 、電気学
能弁 (Eloquence)	口才、 <u>能弁</u>
慫慂 (Encouragement)	勸励、 <u>慫慂</u>
目的 (End)	終、端… <u>目的</u> …成果
実体 (Entity)	現有物、 <u>実体</u>
交易 (Exchange)	交易、引換、両替…
存在 (Existence)	<u>存在</u> 、生活、成立
輸出 (Exportation)	<u>輸出</u>
・	・
・	・
・	・

以上の調査結果を見ると、『袖珍辞書』、『和英語林集成』からの影響は、ほとんどなかったことがわかる。森岡 (1969) が、豊田実氏の辞書の系統的分類を参考にして、試みた辞書分類によると²⁾、両辞書は第 1 期に属するもので、たとえば、

Equivocalness	意味ノ二ツアルこと
Enricher	有徳ニスル人、殖ス人
Egoist	利徳ヲ得タガル人
(以上、『袖珍辞書』より)	
Existence	Oru koto, aru koto
Experience	Nashite shiru koto, shite satoru koto
Extension	Haru koto, nobasu koto ……
(以上、『和英語林集成』より)	

のように、単語対単語訳ではなくて、主に和語を使った説明式になっている。だが、『哲学字彙』の訳語は、ほとんどすべてが漢語で造られたから、一致する訳語が少ないのは当然のことであろう。『字彙初版』は、森岡氏の辞書分類の第 2 期の代表的辞書で、『哲学字彙』への影響がかなりあったといえるだろう。

2.2.4 その他の英和辞書

『哲学字彙』との影響関係をもう少しはっきりさせるため、『哲学字彙』以前に刊行された以下の辞書を調べてみることにする。

- ・『和訳英辞書』(明治 6 年・1873) 東京新製活版所編、東京新製活版所、790 頁

- ・『広益英倭字典』（明治7年・1874）鹿田等編、田中正義等蔵梓（以下、『広益英倭』と略す）、1000頁

まず、『和訳英辞書』と一致する訳語は12語で、次のとおりである。

大悦 (Ecstasy)、教育 (Education)、電気 (Electricity)、能弁 (Eloquence)、目的 (End)、癲癇 (Epilepsy)、平等 (Equality)、証拠 (Evidence)、効験 (Effect)、経験 (Experience)、輸出 (Exportation)、喜悅 (Exultation)

次に、『広益英倭』の訳語を調べたところ、以下のように11語が一致している。

大悦 (Ecstasy)、教育 (Education)、効験 (Effect)、電気 (Electricity)、目的 (End)、元素 (Element)、能弁 (Eloquence)、癲癇 (Epilepsy)、平等 (Equality)、証拠 (Evidence)、喜悅 (Exultation)

両辞書は、『袖珍辞書』および『和英語林集成』より、一致する訳語が少し増えてはいるが、全体的に見て大きな差がなく、この調査結果によると、『哲学字彙』が前の辞書から受けた影響は、ほとんどなかったことがわかる。この他に、『哲学字彙』以前に刊行された辞書が若干あるが、英華辞書の類か、森岡氏の辞書分類では第1期に属するものなどである。

2.3 西周の著作との関係

西周は明治初期の思想界における最高指導者の一人である。彼は論理学、心理学などいろいろな分野において輝かしい業績を残しているが、とくに、哲学興隆の推進者として数多くの哲学用語を造ったといわれている。

本節では、『西周全集』（第1巻・哲学篇）（明治35年、大久保利謙編、宗光書房）に載せてある28編の著作中、『哲学字彙』の刊行された明治14年以前に書かれた13編を対象にして、影響関係を検討してみることにする。対象にする著作目録は、次のとおりである。

- ・「津田真道稿本「性理論」の跋文」（文久元年）
- ・「生性発蘊」（明治6年）
- ・「哲学関係断片」（明治3年－6年）
- ・「百一新論」（明治7年）
- ・「学原稿本」（明治2年頃）
- ・「知説」（明治7年）
- ・「五原新範」（明治3年頃）
- ・「致知啓蒙」（明治7年）
- ・「人智論」（明治10年前後）
- ・「美妙学説」（明治10年前後）
- ・「教門論」（明治7年）
- ・「人世三宝説」（明治8年）

- ・「幸福ハ性靈上ト形骸上ト相合スル上ニ成ルノ論」（明治5、6年頃）

訳語抽出にあたっては、「其^{エキスベリ}笑^{モンス} 験ヲ集メテ、真理^{ツリュース}ヲ徴スル……」（『生性発蘊』）のように、原語のよみが仮名で振ってあるものと、「之ヲ真一(truism)、又自己証明(self-evident)ト謂ヒ、……」（『致知啓蒙』）のように、原語がそのまま載せてあるものを拾った。「Eの部」を調べたところ、異なり語で、原語31語、訳語38語を得た。この中で『哲学字彙』の原語と一致するのは、次の11語である。

原 語	西周の著作	『哲学字彙』
Experience	経験、体験、実験、試験	経験、練過
Experiment	経験上	試験法
Election	撰択学	…選挙、撰択力
Electricity	電気	電気
Element	原質	元素
Egoism	自愛性	主我学派、自制主義
Expression	意思、宣言	文辞、語法、表出、面色
Emotion	情	情緒
Ethnology	人種学	人種学
Extension	外延、辞ノ広	延長、広袤、容性、外延
Enthymeme	散体	散乱推測式

訳語16語の中で、『哲学字彙』の訳語と一致するのは4語しかない。同じ哲学分野で、一致する訳語が多いだろうと推測されるが、意外に少ない。これを見ると、西周からの影響はほとんどなかったといえるだろう。西周の訳語の中、「経験」と「電気」との2語は、『字彙初版』にも見られる。

3 『哲学字彙』が辞書に及ぼした影響

3.1 『増補訂正英和字彙』（再版）との関係

『哲学字彙』（明治14年）の前後に『字彙初版』（明治6年）と『増補訂正英和字彙』（再版）（明治15年、以下『字彙再版』）と略す、1318頁）があり、『哲学字彙』との影響関係を知る上で、よい資料だと思われる。結論からいうと、『哲学字彙』と『字彙初版』とが一致する訳語は40語しかないが、『字彙再版』と一致するのは114語もある。これは、明らかに『字彙再版』が『哲学字彙』から影響を受けたからだといえる。『英和字彙』の訳語には、たとえば

原 語	『字彙初版』	『哲学字彙』	『字彙再版』
Education	養育、教育、教訓…	教育	養育、教育、教訓
Efflux	流出、流出物	流出	流出、泄出…
Electricity	電気、電気学	電気	電気、電気学、電学
Eloquence	口才、能弁	口才、能弁	才口、能弁
Error	謬誤、過失	差錯、過失、謬誤	誤謬、 <u>過失</u> 、 <u>差錯</u> …

のように、『字彙初版』と『哲学字彙』と『字彙再版』との訳語が一致するものが39語あり、これは、『字彙初版』が『哲学字彙』へ影響を与えたといえるもので、「謬誤」(Error)を除いては、そのまま『字彙再版』に取り入れられている。

次に、『字彙再版』と一致する訳語114語から、『字彙初版』と一致する40語を除いた74語は、『哲学字彙』が『字彙再版』へ影響を与えたと思われる訳語で、たとえば、次のようなものがある。

原 語	『字彙初版』	『哲学字彙』	『字彙再版』
Ectype	原語なし	模型、儀範	<u>模型</u> 、 <u>儀範</u>
Effect	成果、 <u>効験</u> …	結果、応報、効験、果報	… <u>結果</u> 、 <u>応報</u> 、 <u>報果</u> 、 <u>効験</u> 、作用
Emulation	…先を争フコト	争先	争先、競争
Entelechy	原語なし	円極	<u>円極</u>
Enunciation	言出、説明、布告	演述、講説	…布告、 <u>演述</u> 、 <u>講説</u>
Esotericism	秘密ノ教	秘教	秘教
Evolution	展開、開方…	化醇、進化、開進	<u>展開</u> 、 <u>化醇</u> 、 <u>進化</u> 、 <u>開進</u> 、 <u>亢進</u> …

『字彙再版』が『哲学字彙』からの影響を受けたと見る理由は次のとおりである。

- イ、「Ectype」、「Entelechy」などは、『字彙初版』に原語が載っていないが、『字彙再版』には載っていて『哲学字彙』と同じ訳語が当てられている。
- ロ、「Enunciation」等は、『字彙初版』には『哲学字彙』と一致する訳語が全くないが、『字彙再版』では「演述」、「講説」が当てられている。
- ハ、「Effect」などは『字彙初版』には『哲学字彙』と一致する訳語が一つしかないが、『字彙再版』では「結果」、「応報」、「果報」が当てられている。
- ニ、「Emulation」、「Esotericism」等は、説明式になっているが、『字彙再版』では各々同じ意味の「争先」、「秘教」という漢語が当てられている。
- ホ、『字彙初版』(明治6年)から『字彙再版』(明治15年)までの間に刊行された辞書は、ほとんどなく、あるとしても英華辞書の類とか、英和辞書の類は全部『袖珍辞書』の類書である。

へ、とくに、『哲学字彙』（明治 14 年）と『字彙再版』（明治 15 年）との間に刊行された辞書は、筆者の調べた限りでは見つからなかった。

西周の訳語である「外延」、「電気」、「経験」の中で、「電気」と「経験」は、すでに『字彙初版』に載っていて、『哲学字彙』と『字彙再版』にもそのまま取り入れられた。「外延」は『哲学字彙』ではなく、西周からの影響かもしれない。

3.2 その他の英和辞書との関係

『哲学字彙』が与えた影響をはっきりさせるため、次の四つの英和辞書を取り上げ、一致する訳語を調べてみる。

- ・『英和双解字典』（明治 18 年・1885）ナツタル著、棚橋一郎訳編、丸善商社書店（以下、『英和双解』と略す）、885 頁
- ・『和訳字彙』（明治 21 年・1888）棚橋一郎、イーストレーキ共訳、三省堂、1277、99 頁
- ・『明治英和字典』（明治 22 年・1889）尺 振八訳、六合館（以下、『明治英和』と略す）、1270 頁
- ・『双解英和大辞典』（増訂第 19 版）（明治 37 年・1904）島田 豊訳、共益商社書店（以下、『双解英和』と略す）、1310 頁

『字彙再版』も含め、五つの英和辞書を調査した結果を表に示すと、次のとおりである。

辞書名 (刊行年)	『字彙再版』 (明治 15)	『英和双解』 (明治 18)	『和訳字彙』 (明治 21)	『明治英和』 (明治 22)	『双解英和』 (明治 37)
一致する訳語 (%)	114 語 (95.8)	98 語 (82.4)	70 語 (58.8)	47 語 (39.5)	44 語 (37.0)

表に取り上げた辞書は、明治 10 年代二つ、明治 20 年代二つ、明治 30 年代一つである。明治 10 年代の二つの辞書における一致する訳語は、それぞれ 114 語、98 語として『哲学字彙』の影響は絶対的であったといえる。しかしながら、明治 20、30 年代になると、その影響力は段々少なくなるが、これは、明治初・中期における訳語が、すぐ生み出され、すぐなくなるなど、その変化が激しかったことを考えると、当然のことであろう。『哲学字彙』を含め、明治 10 年代の辞書における一致する訳語の多いのは、当時の一般的な訳語であったせいでもあろうが、その影響が大きかったことをうかがわせる。言い換えれば、『哲学字彙』が諸辞書の訳語の起点になるといえる。

4 語構成における特徴

ここでは、以上で取り上げた辞書との比較により、語種構成における『哲学字彙』の訳語の性格を明らかにしたいと思う。まず、『哲学字彙』の「Eの部」のうち、本稿の対象訳語にかかわる原語（全67語）に対して全訳語を調べ、『哲学字彙』の前後に刊行された以下の辞書に対しても訳語を調べてみた。『哲学字彙』は原則的に「名詞」のみを扱っているので、ほかの辞書の調査にあたっては、同じ原語であっても「名詞」として扱っているものだけを調べた。調査結果を示すと、次のとおりである³⁾。

辞書名 (刊行年)	袖珍辞書 (1862)	字彙初版 (1873)	広益英倭 (1874)	哲学字彙 (1881)	字彙再版 (1882)	英和双解 (1885)	明治英和 (1889)	双解英和 (1904)
訳語数	94	169	114	124	280	254	282	351
和語 (%)	11 (11.7)	10 (5.9)	21 (18.4)	0 (0.0)	3 (1.1)	9 (3.5)	0 (0.0)	0 (0.0)
和語+コト (%)	22 (23.4)	15 (8.9)	29 (25.4)	0 (0.0)	6 (2.1)	6 (2.4)	8 (2.8)	12 (3.4)
漢語 (%)	30 (31.9)	133 (78.7)	39 (34.2)	123 (99.2)	258 (92.1)	233 (91.7)	186 (66.0)	251 (71.5)
漢語+コト (%)	8 (8.5)	1 (0.6)	6 (5.3)	0 (0.0)	1 (0.4)	0 (0.0)	28 (9.9)	38 (10.8)
その他 (%)	20 (24.5)	10 (5.9)	19 (16.7)	1 (0.8)	12 (4.3)	6 (2.4)	60 (21.3)	50 (14.2)

(備考)

- ・和語+コト：和語にコトが加えられ、説明式になっている訳語（例：務ルコト、取替エルコト）。
- ・漢語+コト：漢語にコトが加えられ、説明式になっている訳語（例：免除スルコト、一樣ナルコト、自由ニサセルコト）。
- ・複合和語も和語に入れる。
- ・助詞、助動詞、接辞のついたものと、サ変動詞も漢語と認める。
- ・「その他」は、混種語および音訓両様の読み方を持っている漢字（例：端、力、終）などである。

まず、『哲学字彙』の語種構成において漢語の割合が目立つ。和語の確例は一つもなく、音訓両様の読み方を持っている1字語（「我」）まで漢語に入れるとしたら、すべてが漢語ともいえる。『哲学字彙』における漢語の割合が、99%台に上るということは、他の辞書がコトを用いた説明式という消極的な方法に止まっているのに対し、『哲学字彙』では、漢語を用いた積極的な訳語化の工夫をうかがうことができる。また、『哲学字彙』以前に比べ、以後の辞書における漢語の割合が急激に増加しているし、『哲学字彙』以前の和語および「和語+コト」の割合が、『哲学字彙』以後、非常に減っている

ことがわかる。つまり、これは『哲学字彙』を起点に和語および「和語+コト」が漢語に変わったと言えるだろう。これは、前章で考察したように、『字彙再版』、『英和双解』など、明治10年代の辞書の訳語と、『哲学字彙』の訳語との一致率が90%前後を占めていることを見てわかる。

5 生存語および死語の性格

本章では、いまから約120年前に造られた『哲学字彙』の訳語が今のところ、どのくらい通用されているかを調べてみて、生死語の性格などについて言及することにする。森岡(1969)では、西周の生存語の調査に『岩波国語辞典』のみを用いているが、これは国語辞書なので、原語に対する訳語として適切かどうかという判断はむずかしい。従って、現代の英和辞書も調べてみなければならない。ここでは、次の辞書を用いて生存語および死語を調査することにする。

□国語辞書

- ・『岩波国語辞典』(第5版)(1995) 西尾 実等編、岩波書店
- ・『新選国語辞典』(第6版)(1993) 金田一京助等編、小学館

□英和辞書

- ・『New English-Japanese Dictionary／新英和大辞典』(1980) 小稲義男、研究社
- ・『スコットフォーズマン英和辞典』(1992) 亀井俊介、角川書店

国語辞書二つおよび英和辞書二つで、調べた結果を三つの類型に分け、説明を加える。

- (A) 国語辞書にアリ、英和辞書にナシ……(訳語としては死語)……38語
家政 (Economics)、模型 (Ectype)、応報 (Effect)、効験 (Effect)、果報 (Effect)、靈験 (Efficiency)、実効 (Efficiency)、文辞 (Expression)、口才 (Eloquence)、分出 (Emanation)、証明 (Elicit)、慫慂 (Encouragement)、方向 (End)、遺恨 (Enmity)、確執 (Enmity)、演述 (Enunciation)、講説 (Enunciation)、拮据 (Effort)、熱心 (Enthusiasm)、沈着 (Equanimity)、碩学 (Erudite)、猜忌 (Envy)、損害 (Evil)、考試 (Examination)、心髄 (Essence)、交易 (Exchange)、感激 (Excitement)、事例 (Example)、激発 (Excitement)、感奮 (Excitement)、聳動 (Excitement)、展性 (Expansibility)、叙述 (Exposition)、生物 (Existence)、喜悦 (Exultation)、大悦 (Ecstasy)、広袤 (Extension)、不和 (Enmity)

これは、日本語全体として見れば生存語であるが、原語に当てられた訳語としては死語というべきものである。なぜなら、この中には、原語に対するあて方の不適当な語など、訳語としてはほとんど使わないためである。たとえば、「Evil」の訳語として

「損害」を当てているが、これは不適切で、「損害」は、「Loss」とか「Damage」の訳語として妥当であると思われる。

(B) 両方ともにナシ…… (死語) …… 39 語

偏僻 (Eccentricity)、消魂 (Ecstasy)、奪魄 (Ecstasy)、儀範 (Ectype)、
功能 (Efficiency)、黽勉 (Effort)、鼓励 (Effort)、心期 (Expectant attention)、
掄撰 (Election)、窘迫 (Embarrassment)、争先 (emulation)、謬誤 (Error)、
稟賦 (Endowment)、困倦 (Ennui)、談詒 (Ennui)、円極 (Entelechy)、炎
情 (Enthusiasm)、差錯 (Error)、環象 (Environment)、清静 (Equanimity)、
逸士 (Eremite)、元精 (Essence)、真体 (Essence)、運質 (Essence)、幽隱
(Euritic)、左券 (Evidence)、照憑 (Evidence)、化醇 (Evolution)、查驗
(Examination)、開進 (Evolution)、儀範 (Example)、除免 (Exemption)、
存体 (Existence)、虚靈 (Spiritual existence)、厭勝 (Exorcism)、練過
(Experience)、註説 (Explanation)、面色 (Expression)、容性 (Extension)

これは、原語に対するあて方や使用率などの面から、明らかに死語といえるものである。死語の中には、国書に用例のある語が 18 語、漢籍に用例のある語が 37 語もあるが、漢籍にのみ用例のある訳語は、ほとんど死語になったことがわかる。

(C) 両方ともにアリ…… (生存語) …… 40 語

教育 (Education)、結果 (Effect)、流出 (Efflux)、努力 (Effort)、自己 (Ego)、
選民 (Elect)、選挙 (Election)、電気 (Electricity)、元素 (Element)、過失
(Error)、能弁 (Eloquence)、解脱 (Emancipation)、情緒 (Emotion)、困
却 (Embarrassment)、奨励 (Encouragement)、目的 (End)、結末 (End)、
資質 (Endowment)、不善 (Evil)、勢力 (Energy)、元気 (Energy)、実体
(Entity)、癲癇 (Epilepsy)、平等 (Equality)、多義 (Equivocal)、隱者
(Eremite)、秘教 (Esotericism)、永遠 (Eternity)、証拠 (Evidence)、進化
(Evolution)、経験 (Experience)、解釈 (Explanation)、鼓舞 (Encourage-
ment)、輸出 (Exportation)、語法 (Expression)、延長 (Extension)、外延
(Extension)、外界 (Externality)、表出 (Expression)、存在 (Existence)

これは、国書に 23 語、漢籍に 27 語の用例のあるもので、国書および漢籍にともに用例を持っている語は、大体生き延びたといえるだろう。すなわち、これは、昔からすでに使われてきた言葉で原語を訳したのは、生き延びやすかったということを意味する。生存語の定着過程および死語になった語の原因などについては、稿を改めてふれることにしたい。

6 むすび

以上、『哲学字彙』の「Eの部」の訳語について影響関係を中心に調べてみたが、まとめると次のとおりである。

・まず、『哲学字彙』の資料的な性格および意義を明確にした。つまり、本書が前の辞書から受けた影響は僅かだったが、後の辞書（とくに明治10年代）に与えた影響は大きかったことを明らかにした。これを表に示すと、次のようになる。

〈『哲学字彙』以前に刊行された辞書の訳語との一致率〉

辞書名 (刊行年)	『袖珍辞書』 (文久2)	『和英語林集成』 (明治5)	『字彙初版』 (明治6.1)	『和訳英辞書』 (明治6.12)	『公益英倭』 (明治7)
一致する訳語 (%)	8語 (6.7)	8語 (6.7)	40語 (33.6)	12語 (10.1)	11語 (9.2)

〈『哲学字彙』以後に刊行された辞書の訳語との一致率〉

辞書名 (刊行年)	『字彙再版』 (明治15)	『英和双解』 (明治18)	『和訳字彙』 (明治21)	『明治英和』 (明治22)	『双解英和』 (明治37)
一致する訳語 (%)	114語 (95.8)	98語 (82.4)	70語 (58.8)	47語 (39.5)	44語 (37.0)

・『和訳英辞書』および『公益英倭』は、『字彙初版』の後の辞書であるにもかかわらず、『哲学字彙』との一致する訳語が、ずっと少ないのはなぜだろう。それは、『公益英倭』は、森岡氏の辞書分類、第1期に属するものであり、『和訳英辞書』は、所属が不明であるが、筆者の調べたところでは、第1期に属するものであるからだと思われる。そして、表を見てわかるように、『哲学字彙』が前の辞書と一致する訳語の割合は、辞書別におよそ6%~30%くらいに止まっているが、後の辞書と一致する訳語の割合は、80%（明治10年代基準）をこえている。これは、『哲学字彙』には独自の訳語が多く、その訳語が後の辞書にもそのまま取り入れられたことを意味する。この点から見て、辞書らしい辞書がほとんどなかった明治初期における『哲学字彙』の影響力は、非常に大きかったといえるだろう。

・漢籍にある用例の意味と、その用例が訳語として採用された場合の意味とが違う場合があるといわれているが、全体に対する割合についての研究は見当たらない。実際調べたところ、全119語の中で3語しかなく、ほとんどすべては同じ意味で用いられたことがわかる。

・国書にある用例（70語）より、漢籍にある用例（100語）の方が遥かに多い。これ

は、国書の語彙が足りないせいもあっただろうが、辞書の編者が当時の知識人層として、漢文に精通していたからだと思われる。

・漢籍と国書にともに用例のない訳語は、明治時代の新造語である可能性が少なくないもので、その種の語は 14 語 (11.8%) であり、その他は原語に訳語を当てるとき、既存の語を用いたものである。

・今から約 120 年前に製作された辞書でありながら、現在まで生き延びた語 (国語辞書および英和辞書にともに載せてあるもの) は 40 語 (33.6%) であり、それは大体国書および漢籍にともに用例のある語であることがわかる。単純に、国語辞書に載っているものを生存語とすれば、78 語 (65.5%) に上る。

・以上の見解は、「E の部」に限ってのことではあるが、「他の部」に対してもサンプリング調査 (影響関係、語構成の割合など) をしてみたところ、大体同じ傾向を見せしており、「E の部」と大差はないと考えられる。

・今後は、『哲学字彙』の各版別訳語の性格、意義などを明らかにした上で、当時の哲学関係の翻訳書、一般書などを考察の対象に入れ、明治時代訳語の現代語への定着のメカニズムを研究したいと思う。

〔註〕

- 1 たとえば、『哲学字彙』では名詞形の「Encouragement」に訳語「奨励」を当てているが、『英華字典』では動詞形の「Encourage」に同じ訳語を当てている。この種のものは便宜上、同じ語として扱うことにする。
- 2 森岡健二編著『近代語の成立 明治期語彙編』2～6 頁を参照。
- 3 ちなみに、ここで取り上げた諸辞書の割合は、名詞のみに限ってのことであり、ほかの品詞までを含むと漢語の割合は、下の表に示した数値よりもずっと低くなるだろう。参考までに、『字彙初版』全体の漢語の割合は 38.4% である (森岡 1969)。従って、辞書全体の性格とは言い難い。

〔参考文献〕

- 豊田 実 (1939) 『日本英学史の研究』、岩波書店
大阪女子大学附属図書館編 (1961) 『大阪女子大学蔵日本英学資料解題』
森岡健二 (1969) 『近代語の成立 明治期語彙編』、明治書院
永嶋大典 (1970) 『蘭和・英和辞書発達史』、講談社
飛田良文 (1979) 『哲学字彙訳語総索引』、笠間書院
飛田良文・惣郷正明 (1986) 『明治のことば辞典』、東京堂出版
飛田良文 (1992) 『東京語成立史の研究』、東京堂出版
佐藤 亨 (1992) 『近代語の成立』、桜楓社
沈 国 威 (1994) 『近代日中語彙交流史』、笠間書院
荒川清秀 (1997) 『近代日中學術用語の形成と伝播 地理学用語を中心に』、白帝社

[付記] 本稿は、第 43 回国際東方学会議（1998.5.22、23 於東京・国立教育会館）において、口頭発表したものに修正を加えたものである。席上、貴重な御助言を下された方々に対し、改めて感謝申し上げる次第である。

（ぱく きゅんちよる・北大大学院博士課程）